

相国寺御用達

京菓菜

雲龍

雲龍は相国寺に保存されている狩野洞春の龍画に感銘を受け創作した、京菓匠・俵屋吉富の代表的な名菓です。雲龍の奥深い旨さの秘密、それは精選された材料と、一本一本心をこめて巻いていく手づくりの味にあります。心をこめた贈り物に幸福を呼ぶ雲龍をどうぞ……。



平成二十二年 夏号(第九十四号)

圓明

大本山相国寺
相国会本部



相国会総裁 有馬頼底
 副総裁 江上泰山
 会長 片岡匡三
 本部長 佐分宗順
 平成二十二年盛夏

暑中お見舞い申し上げます

内局

管 承天閣美術館館長	有馬頼底	承天閣事務局長	長栄寺住職	鈴木景雲
宗 務 総 長	真如寺住職	承天閣参事	大應寺住職	久山弘祐
庶 務 部 長	玉龍院住職	鹿苑寺執事	普廣院住職	山木康稔
教 務 部 長	豊光寺住職	// 執 事	長得院住職	緒方香州
法 務 部 長	林光院住職	// 執 事	是心寺副住職	和田賢明
財 務 部 長	大光明寺住職	慈照寺執事	養源院住職	平塚景堂
教 学 部 長	普廣院副住職	// 執 事	桂徳院住職	小塚景堂
財 務 部 長	光源院副住職	// 執 事	瑞春院住職	須賀玄集
教 学 部 員	荒木泰量	執 事		

目次

表紙写真◎相国寺「開山堂」

カラークラピア◎鹿苑寺客殿一階障壁画落慶並びに故岩澤重夫画伯追悼法要 2

御挨拶 宗務総長 江上泰山 6

鹿苑寺客殿一階障壁画落慶並びに故岩澤重夫画伯追悼法要 10

南苑寺が国登録有形文化財へ 南苑寺住職 小野塚越山 12

はるかなる宇宙への想い 演劇塾 長田学舎 斉藤維明 14

本山だより 22

パキスタンの北部をめぐる(二) 向陽寺住職 鈴木元拙 25

教化活動委員会活動報告 教化活動委員会委員長 佐分宗順 55

教区だより 63

カラークラピア◎前管長 止々庵老大師 十七回忌法要 75

◎僧堂拈華室老大師 三回忌法要並びに止々庵老大師 十七回忌宿忌 76

◎第六教区 沖繩 嶺南山 通天寺 落慶法要 77

承天閣だより「柴田是真作品」 78

心のすがた 80

鹿苑寺客殿一階障壁画

撮影／柴田明蘭



客殿下間から上間をのぞむ



客殿上間から下間をのぞむ



管長猥下と談笑される故岩澤重夫画伯のご子息岩澤有徑氏

鹿苑寺客殿一階障壁画落慶
並びに故岩澤重夫画伯追悼法要

本文10頁参照



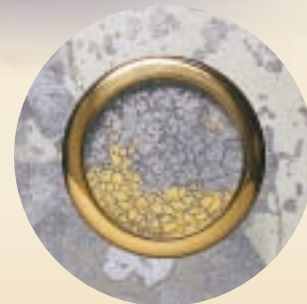
中の間 北面



下間 北面



西面



上間



中の間 東面



中の間 南面

御挨拶



宗務総長 江上泰山

相国寺派寺院御住職各位並びに寺庭婦人の皆様、そして相国会檀信徒の皆様、毎日大変暑い日が続いておりますが、ご機嫌如何お過ごしでしょうか、謹しんで暑中お見舞申し上げます。

一昨年三たび宗務総長の要職を拝命してより二年余りが経過致し、任期満了まで残りわずかになりましたが、管長猥下始め一山ご老宿並びに内局員各位のご高配により大過なく運営出来ましたのも、派内寺院各位はもとより相国会々員の皆様のご支援、ご協力のたまものと有難く感謝申し上げます。

管長猥下におかれましては、ご就任以来今春で三期十五年を無事お務め頂き、更にもう一期お務め頂く事になりました。宗派にとりましても大変有難い事でございます。ご同慶の至りに存じ上げます。

私が宗務総長就任以来派内のご親教をお願いしてより七年間に亘り各教区を順次お邪魔致して参りましたが、皆様より格別のご好評を頂き、本山と末寺、特に檀信徒の皆様には本山相国寺の在り方や、菩提寺のことなども理解して頂くよい機会になりました事は誠に有難いことと喜んでいる次第でございます。

本年は第五教区島根県出雲地方にお邪魔致すことになっておりますのでよろしくご配慮下さいますようお願い致します。

次に、昭和五十九年より承天閣部員として五年余りお務め頂きました第二教区大原草生地区智蔵院住職であられた井上道友師が去る四月八日釈尊降誕会しゅうたんえの日に急逝されました。

五月二十二日管長猥下導師のもと津送（本葬）が行われ、本山より誄るい（弔辞）と香資金一封を奉呈して謹しんで弔慰を表明させて頂きました。

その井上道友師との関係は、私が教字部を担当していた時に師が趣味として詠んでおられた俳句を、昭和六十一年七月発行の円明誌第四

十六号(お盆号)に掲載させて頂いてより平成九年第六十七号(正月号)迄の十五回十一年の長きに亘り、一回に五句から十句をご投稿頂き花を添えて頂きましたので、こゝに句作の中から五句を選びご紹介して井上道友師の追悼とさせて頂きます。

大原女の もてなす茶屋や 五月雨

一頼り 夏うぐいすの 寂光院

胡瓜もみ 一皿のみの 朝餉かな

明け方の 狐の走る 寺の庭

柚子風呂に 子等はしゃぎて 掛けあへし

例年の通りこの円明誌が皆様のお手元に届く頃は、お盆をお迎えのことと存じます。お盆を迎えるにあたり、一言申し添えさせて頂きます。相国寺の南から総門をお入りになると放生池ほうじょうちがあります。七月から八月にかけて蓮が開花致します。境内を散歩する人達の朝の楽しみは、六十株に近い蓮の花が咲くのを見ることです。

その一つ一つの花には、白君子しろくんし、碧翠へきすい、酔妃すいひ、一天四海いちてんしかいなどの名前がつけられていて、花の位の高さを思わせる。宝珠のような淡い黄色

の蕾に光が射し、今朝は開くかと期待をもつて出掛けてジィッと見ている人があります。

しかし四日の命というこの花の命をいつの時も思うのですが自力で開花した花びらを閉じ、次の朝も自力で閉じるのが、四日目に閉じる力を失って、はらはらと散るさまは、人間の命にかさなって心に響くものがあります。

お盆にはお花を持ってお墓参りをされると思います。「回向えんぎょう」という言葉は亡き人のためにのみ供養することだと思ひ込んでおられる方が多いのです。実は亡き人に向けられた心を自分の方に百八十度向きを廻すことです。『この花のように風雨に耐えて咲いた自然の花のように、私も人生の苦しみに耐えてしっかりと生きていきます、私たちの心が本当の自分に気づきしっかりと元気で生きて行きますからご安心下さい』と墓前に感謝とお礼の挨拶をして、今、生かさせて頂いている先祖のお陰に気づき、感謝の気持ちに目覚めて頂きたいと願わずにはおられません。

大変暑い日が続きます。皆様のご健勝をお祈り致します。

鹿苑寺客殿一階障壁画落慶 並びに故岩澤重夫画伯追悼法要

(関連写真2～5頁)



五月二十七日午前十一時より鹿苑寺方丈に於いて、客殿一階障壁画落慶法要並びに故岩澤重夫画伯の追悼諷経が有馬頼底管長導師のもとで執り行われた。法要に先立ち、午前十時より、新しい障壁画が参列者に披露された。

故岩澤重夫画伯は、有馬管長が徒弟時代を送られた日田の出身で、これが縁で、鹿苑寺客殿障壁画の制作を依頼することになり、約五年の歳月をかけ完成された。

故岩澤重夫画伯の略歴は左記の通り

岩澤重夫画伯略歴

昭和二年 (一九二七) 大分県日田市生まれ

昭和二十七年 (一九五二) 京都市立美術専門学校卒業(現在の京都市立芸大)

昭和二十九年 (一九五四) 堂本印象氏に師事(東丘社入塾)

昭和三十五年 (一九六〇) 第三回新日展「堰」特選白寿賞受賞

昭和三十六年 (一九六一) 第四回新日展「晨曦」無鑑査特選白寿賞受賞

昭和四十三年 (一九六八) 第十一回新日展「昇る太陽」菊華賞受賞

昭和四十六年 (一九七一) 日展審査員となる(以後合計十回)

昭和五十年 (一九七五) 紺綬褒章受章(以後合計十四回受章)

昭和五十五年 (一九八〇) 日展評議員となる

昭和五十七年 (一九八二) 東京歌舞伎座綴帳原画「古今青松」製作

昭和六十年 (一九八五) 第十七回日展「氣」文部大臣賞受賞

第八回山種美術館大賞展「古都追想(西安)」大賞受賞

祇園祭菊水鉢見送り原画制作

京都府文化功労賞受賞

第五回MOA岡田茂吉賞大賞受賞

日本芸術院賞受賞「溪韻」日本芸術院所蔵

日本芸術院会員就任

日展常務理事就任、日田市名誉市民となる

勲三等瑞宝章受賞、京北町名誉町民となる

日展顧問となる

平成二十一年(二〇〇九) 金閣寺客殿障壁画六十三面を完成、文化功労者となる

十一月七日逝去



南苑寺が国登録有形文化財へ

南苑寺住職 小野塚越山

臨済宗相国寺派萬年山南苑寺は、元管長橋本独山禅師の創建で、三朝温泉の南斜面に境内を構える寺院です。福井県大飯郡大嶋村に所在した境林庵を廃止、改称して大正十五年（一九二六）に寺地を現在地に移転しました。

昭和二年（一九二七）完成の山門、庫裏、本堂、隠寮の四件が、本年三月十九日に国の文化審議会で、国の登録有形文化財として、指定するよう文部科学大臣に答申されました。

鳥取県教育委員会事務局文化財課出版の『鳥取県近代建造物、鳥取県の近代を支えた文化遺産』に掲載されている



記事によると、山門は日光大猷院靈廟皇嘉門などと同様の、明様式漆喰塗込とした袴門形式の楼門で、庫裏火灯窓とともに寺観に趣を添えています。本堂は、入母屋造、平入、一部二階建の数寄屋風建築で、柱、梁など軸部では無節の榿、松の良質材、床の間まわりに唐木、櫻を使い分け漆喰も場所によって仕上げを変えています。

本堂の東に建つ懸造の隠寮も数寄屋風建築で、杉、黒檀、櫻、桐、肥杉などを使い分け、明り取り窓を丸窓にするなど、各建築とも意匠面に趣向を凝らし、木材の吟味も行き届いた近代寺院となっています。

創建者の橋本独山禅師は、明治二年（一八六九）新潟県南魚沼市に生まれ、十七歳の時画家を志し、上洛して富岡鉄斎の門に入り、画、経史等を学びました。しかし二十一歳で発心し、天龍寺僧堂に掛搭、峨山昌禎老師に参じ、印可を受け、京都嵯峨の鹿王院住職となりました。更に、衣笠の功雲院龍淵元碩老師に通参して、その蘊奥を尽くしました。

大正十年（一九二一）弟子の山崎大耕老師に僧堂を譲り、山内の林光院に隠棲しましたが、五十八歳頃から右手が神経痛となり、各地で湯治しましたが思わしくなく、たまたま鳥取県の信者が三朝温泉を紹介しました。ひと夏ここで湯治した所完治したため感謝して南苑寺創建を発願しました。

開山を師の峨山禅師、開基を両親として、それぞれの大恩に感謝するため、得意の書画の謝礼で建立されたのです。

※平成二十二年五月二十日付官報に登録有形文化財として掲載されました。

「はるかなる宇宙への想い」

演劇塾 長田学舎 斉藤維明

西の空には未だ夕焼けの名残の茜色がわずかに漂っていると云うのに、深い藍色に沈む東山の稜線の上には宵の明星―金星が燦と瞬いています。その金色に輝く光は正に金星と呼ぶに相応しい瞬きです。私の京都生活も振り返れば早、半世紀に成ろうとしています。こんな光景を見ると、田舎の星空を思い起こします。私の生まれ育った北海道の北部の山村は、それこそ手が届くかと錯覚する程に、大小の星々が銀の砂を撒いたように空一杯に広がって迫ってきます。冷え冷えとした冬の夜空に瞬く星達も、満天に降るが如くきらめく夏の星々も、極当り前に見慣れたものでした。時としてそれ等は、哀しい心を癒して呉れたり、くじけて折れた心に勇気を与えて呉れる友達でした。中でも、北の空に常に有る北極星や北斗七星は、子供にもよく判別出来る親しみの深い星でした。残念乍ら、京都では、余程空気が澄んだ夜空の時でないければその姿を認めるのは難しいのですが。

人は太古の昔から、太陽や月を神と崇め、星々を、人の社会に起きる個人や民族、国家の運勢の吉凶を支配するものとして畏怖してきました。又同時に、季節や方位、時刻を知る手だてとして利用してきました。そして、夜空に点在する大小数々の星をグループ分けにして、人の身のまわりの道具や動物、人物、更に各民族が持つ神話などと結び付けて、星座を創り出してきました。

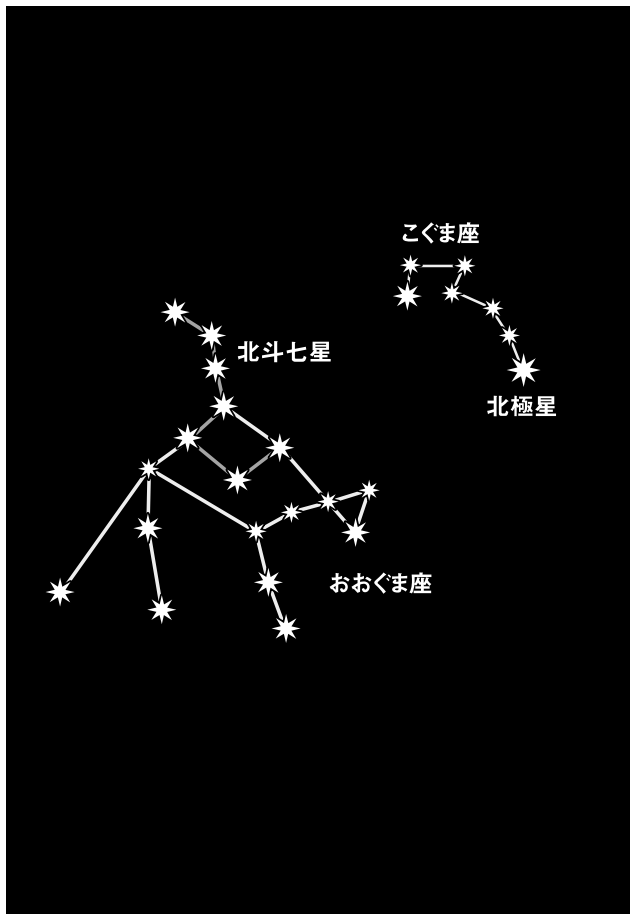
星座は、民族や国々によって見立てが異なります。例えば、今日、おおくま

座と呼ばれている星群の主要部分を形成する北斗七星を、水を汲む柄杓に見たてたり、こぐま座の北極星の周囲を回る処から、車や荷車に見たてたり、船の舵に見たてたりと様々です。そして、天文学の進歩と情報網の発達によって、二十世紀初期に整理され、一九三〇年国際天文同盟の制定と云う形で、どの星も重複も脱落もない現在の八十八の星座に纏められました。

北極をまわる、誰でもが知っている、北斗七星を含むおおぐま座と、北極星を含むこぐま座にまつわるギリシャ神話を書き添えます。

月の女神、アルテミスの侍女達の中に、カリストと云う娘がいました。カリストは活発な娘で、野山で狩りをするのが好きでした。その快活な姿をみた大神ゼウスは、アルテミスの姿に化けてカリストに近づき、彼女をうばいました。やがてカリストは男の子を生みますが、ゼウスの妻ヘラによって熊に変えられ、森に追いやられます。それから十数年の時が流れ、カリストの子、アルカスは立派な若者に育ちました。母親の血を引いて狩りの名手となったアルカスは、ある日、森に行き、大きな熊に出会いました。その熊を自分の生みの母親とも知らず、その心臓に槍を打ち込もうとした時、大神ゼウスは、アルカスに母親殺しの大罪を犯させまいと、アルカスも熊に変え、二人を天上にあげ星座にしたと云う。しかも尚、ゼウスの妻ヘラの嫉妬の怒りは解けず、大熊と小熊とはいつも天の北極のまわりを回転して、地平線の下へ入って休息することを永遠に赦されなかったと、ギリシャ神話は語っています。北極星を含むこ

ぐま座は、不思議にもおおぐま座の北斗七星とよく似たやはり七つの星が、小形の柄杓のように並んだ部分を中心になっていることから、この二つの星座は親子と言えるのではないのでしょうか。(日本では北極星が一般的となっていますが、古くは北極さま、北辰、妙見、目当て星、方角星など種々の呼び名で広く親しまれていました。殊に、妙見の呼び名は仏教の信仰と深い係わりが



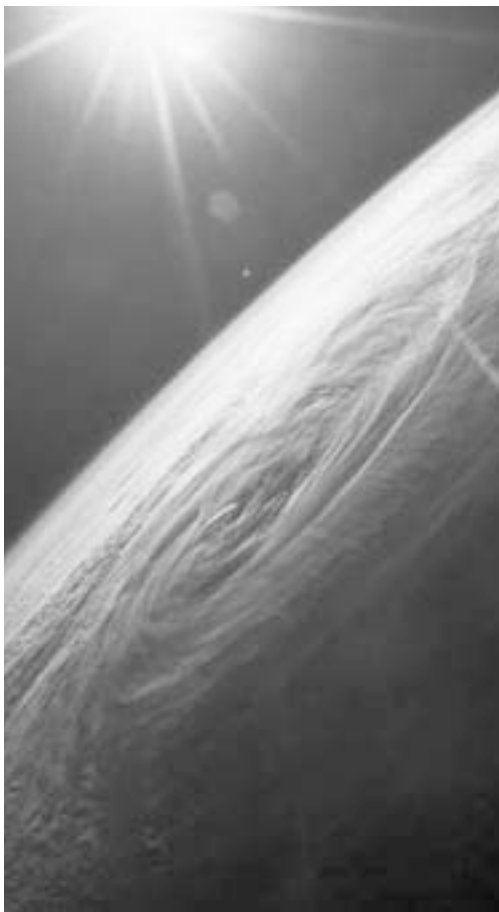
ありました。妙見すなわち妙見菩薩は北極星の菩薩で、災害から人を守る仏様として平安時代の昔から信仰されていました。）

古代から人類が天体―宇宙にいただき続けた畏敬と憧れは、二十世紀半ば以降の宇宙科学の発展とそれを支える技術の目ざましい進歩に依って、すっかり様変わりしました。それ迄のお伽噺の世界か、漫画の世界のように思われていた事が、アメリカのアポロ宇宙船の月面着陸という驚きの偉業によって覆されることとなります。テレビの衛星放送で全世界に放映された宇宙飛行士が月面に降り立った姿は、約半世紀を経た今も鮮明な記憶として残っています。それ以降、アメリカ、旧ソ連の宇宙開発競争が激化しますが、二十一世紀に入ってから、国際協調の気運が高まり、現在数カ国によって国際宇宙ステーションの建設が進行中です。この間には、女性を含む何人もの日本人宇宙飛行士が誕生しました。彼らの宇宙での活躍は、リアルタイムでテレビのニュースで放送され、その都度、私達に感動と勇気を与えて呉れました。昨年末から、日本人宇宙飛行士として初めて、野口さんが、宇宙での長期滞在に挑戦しました。そして、今年の五月には、日本人二人目の女性宇宙飛行士の川崎さんが、野口さんが待つ国際宇宙ステーションに飛び立ち、二人で数々のパフォーマンスを演じ、私達を喜ばせて呉れました。そして、川崎さんが五月下旬、野口さんが六月上旬に無事に地球に帰還した事は衆知の通りです。

更に、六月十三日には大きな感動がありました。宇宙航空研究開発機構



(JAXA)が、二〇〇三年に打ち上げた小惑星探査機「はやぶさ」の奇跡の地球帰還のニュースです。この「はやぶさ」は、宇宙のはるか彼方三億キロの小惑星「イトカワ」の表面砂などを持ち帰ると云う、アポロの月面着陸に匹敵するような世界初の計画で打ち上げられました。日本の科学の叡智と高い技術の結集された「はやぶさ」は、二〇〇五年に「イトカワ」への着陸に成功しましたが、その後数々の機械や装置などのトラブルに見舞われます。一時期は行方不明になると云う絶体絶命のピンチになったこともあったと言われます。その度毎に、「はやぶさ」プロジェクトチーム全員の智慧と努力と忍耐と、決断がそ



の危機を救いました。「はやぶさ」は、単に科学技術の粋を集めた探査機と云うより、まるで生命のある生き物の如く、JAXA管制室からの指令に応えたと言われています。六月十三日、オーストラリアの夜空に長く明るい光芒を描いた「はやぶさ」は無数の光の玉を発し乍ら、一瞬大きな輝きを放った後、七年、六十億キロに及ぶ苦難の宇宙の旅の幕を下ろしました。テレビ画面に写る大きな流れ星のような「はやぶさ」の最後の勇姿に、私は大きな感動と共に、哀惜の情が心に広がるのを禁じ得ませんでした。

人類の宇宙への飽くなき夢とロマンの挑戦は、地球と人類にどんな未来をもたらすのでしょうか。

参考資料 『星座の神話』原惠著 恒星社厚生閣出版

平成二十二年度 在錫者名簿(雨安居)

愛知(妙)	京都(南)	京都(相)	福岡(東)	香川(東)
福昌寺 <small>僧徒</small>	光雲寺 <small>徒</small>	光源院 <small>徒</small>	莊嚴寺 <small>徒</small>	正樂寺 <small>徒</small>
羽澄一乘	中川秀峰	荒木文元	山崎承宗	上杉正航
兵庫(妙)	栃木(雲)	福岡(大)	京都(妙)	石川(国)
靈雲寺 <small>徒</small>	願成寺 <small>徒</small>	禪壽寺 <small>徒</small>	金臺寺 <small>徒</small>	吉祥寺 <small>徒</small>
林明慶	長尾徳宏	津田宗山	倉内正道	山田慈康

○前堂転位式

昨年十一月二十一日、一教区林光院（澤宗泰住職）徒弟澤宗秀師の前堂転位式が挙行された。師は本派僧堂、建長僧堂で長年修行し研鑽を積まれた。これからの活躍が期待されている。



拝塔香語は左の如し。

年山峭峻水潺湲 黄葉翻階誇美妍
今日仰望真面目 孤明歴々満三千

拝塔香語は左の如し。

西来庵裡臘朝天 凜々宗風大覚禪
吾唱報恩酬徳句 妙灯一点誓真前

○本派新寺建立落慶

十二月二十日、勸請開山に荻野獨園禪師を仰ぎ、沖繩に新たに建立された嶺南山通天寺（三浦隆心兼務住職）で本堂落慶式と本尊聖観音菩薩の開眼法要が厳修され、本山より有馬管長、江上総長、坂根庶務部長、山木鹿苑寺執事長、平塚慈照寺執事長、矢野教学部員、慈照院副住職久山哲永師、また通天寺の教区である六教区より松本憲融（光明寺住職）宗務支所長や三教区法雲寺副住職加藤幹人師、五教区西光院副住職金森孝志師、他有縁の寺院、在家信者が出席した。法要後に管長より住職辞令が渡され、祝辞が述べられた。その後場所を移して祝宴となり、三浦住職より新寺での布教活動への決意と抱負が語られた。同住職は現在五教区西光寺の住職を拝命しており、暫くは通天寺を兼務することとなる。

（関連写真は巻末カラー参照）

○前堂転位式

十二月一日、六教区広護寺（井上義堂住職）徒弟井上宗光師の前堂転位式が挙行された。師は本派僧堂で修行され、現在は副住職として自坊法務を務めている。新たな布教活動に期待が寄せられている。



落慶と開眼の香語は左の如し。

沖繩通天寺落慶祝語
甫住通天祝万年 甫はしめて住す通天、万年を祝う
浮雲流水好隨縁 浮雲流水、好隨縁
明々歴々無辺境 明々歴々無辺の境
添得新興臨濟禪 添得り新興臨濟の禪
大龍叟

通天寺本尊開光祝語
八万四千清淨観 八万四千の清淨観
一毫頭上放光寒 一毫頭上、放光寒すさまじじ
唯固南嶺人無識 唯だ固の南嶺、人の識る無し
未免山僧點出看 いまだ免れず、山僧點出して看せしむ
大龍叟

○前堂転位式

十二月二十一日、一教区光源院（荒木元悦住職）徒弟荒木泰量師の前堂転位式が挙行された。師は長年建仁僧堂で修行され研鑽を積まれた。現在は副住職として自坊法務や本山事務に務めている。これからの活動が期待されている。



拜塔香語は左の如し

赫赫法燈禅味深 國師面目夢中尋
一陽來復當佳節 照顧細心隨処臨

○第五回臨黃教化研究会

二月九日～十日、花園大学内花園会館において臨黃合議所主催による第六回臨黃教化研究会が開催され、本派一教区より普廣院副住職山木雅晶師、慈照院副住職久山哲永師、真如寺副住職江上正道師、二教区より竹林寺住職牛江宗道師、大應寺住

職久山弘祐師、四教区より海岸寺住職石崎靖宗師、六教区より感心寺副住職芝原祥三師の七名が参加、また開講式に江上宗務総長、佐分教学部長が出席、佐分部長は終日出席し研修生の指導にあたった。本派若手和尚等は他派の和尚方と一緒にあって研鑽を積んだ。

○布教師特別研修会

二月二十六日、東福寺本山において布教師特別研修会が開催され、布教師会副会長の松本憲融師（六教区光明寺住職）はじめ、石崎靖宗師（四教区海岸寺住職）、牛江宗道師（二教区竹林寺住職）、福場宗康師（五教区萬福寺住職）の本派布教師が参加した。開会式・閉会式には江上宗務総長、佐分教学部長も出席した。今年は五年に一度厳修される布教師先亡齋会にあたる年で、布教化に尽力された先師の遺徳を偲んだ。

（以下57頁に続く）

PAKISTAN



仏教の栄えた国
パキスタンの
北部をめぐる

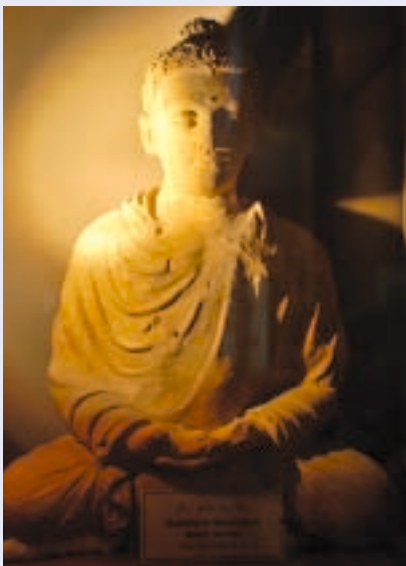
玄奘法師「大唐西域記」に魅せられて

第四教区 向陽寺 住職 鈴木元拙

パキスタンの正式国名はパキスタン・イスラム共和国といます。国名の示す通り、国教をイスラム教と定め、国民の95%がイスラム教徒であり、あとの5パーセントはキリスト、ヒンドゥー、シク、拝火教徒などがわずかついで占めています。仏教に興味を示す人、それを信仰ではなく生業とする人達はいても、仏教徒は皆無に等しいといえます。

かつて、仏教が栄えたのは北西部を中心とした古代ガンダーラの地域でありました。マウリヤ朝代のアシヨールカ王（紀元前268～232年）





2~3世紀 仏陀ストウッコ(漆喰像)

は、今の北インドから西方アフガニスタン一帯に広め、クシヤナ朝代(1~5世紀)で繁栄を極め、仏教を加護し政治の礎として統治が行われていました。

暫くは、仏教による善政が布かれていましたが、5世紀半ば中央アジアのフン族(白匈奴)の侵攻に遭い、北インドのグプタ朝の時代をも含め、仏教の衰退が加速し、遂に壊滅して、そのまま立ち直ることなく現在に至っているのです。

現在のパキスタンは、アフガニスタン、イラン、中国、そしてインドと4つの国と接しています。

とくに、このたび訪れた北西辺境州とノーザンエリアは長い歴史の過程でアフガニスタンの統治下にあつて、今なお民族・文化・風土ともに中央アジア的であります。

それが故に、昨今報道されているように、アルカイダ、タリバンなどテロリストの流入、隣接国インドとカシミールを舞台に過去3回にわたり戦争となった未確定国境線と核兵器を含む微妙な緊張関係、そして自爆テロなど国内の政情不安による生々しい事件が頻発しており、全てが穏やかで平和を享受している国とはいえません。

しかしこの国は、かつて、仏教で輝いた地域、オリエントとインドを結んだ道、ブッダロードないしはシルクロードが通った谷間、法顕も玄奘法師も書き留めた邑々、大谷探検隊やスタインが越えた峠等々を今に残している仏教遺産を有する聖地の国でもあるのです。

今回の旅は、色々な制約がありましたがかつて仏教が栄えていた時から今に繋がる時代背景を有した場所に立ち、先人の伝えてくれた往年の雰囲気を感じ味わいながらの旅でありました。

日本からパキスタンへ (十月二日・一日)

成田から北京経由、約11時間で首都イスラマバードに着きました。このフライトは崑崙(コンロン)山脈やカラコルム山脈をまたいで飛びます。昼間ならば上空から眺める山脈の俯瞰図は壮観であるはずですが、通過時は夜9時頃、残念ながらかすかな月明かりで照らし出された灰色の山肌が視界いっぱいに入ってきただけでありません。

パキスタン航空では女性の乗務を認めないお国の事情なのでしょう。乗務員は全員男性で、立派なあごひげを蓄えたたくましそうな人たちが、あれこれとお客のサービスに携わっていました。また、北京での駐機中には、何人かの乗務員はお客にかまうことなく座席の間で、額を床につけて祈っていました。機中では当然お酒類のサービスもありません。イスラム教を国教とする国だから出来る公務中の光景でありました。

空港には、昨年大阪で知己となった日本語が上手なパキスタン人のスルーガイド、Mさんが出迎えてくれました。また、日本からは、パキ

以下の記述は、特に前述した特定の事柄に絞って見聞してきたことではなく、広く関わりのあるイスラマバードとペシャワール以北、つまりパキスタン北部の様子を見聞したものです。



コワリ峠 (3118m) 付近(山の向うは、アフガニスタン)

スタンの大学で国語ウルドゥー語を勉強していた女性Nさんが終始気配りをしてくれたお陰で、道中の関所、難所を通り抜け、予定通りの旅程をこなすことができたのは有難いことでした。

首都イスラマバードから 北西辺境州のチトラルへ（十月三日・二日）

玄奘三蔵法師様（以下玄奘と略させていただきます。）は「大唐西域記」（以下西域記と略します。）の中で、伝聞国として「商弥国」のことを書いています。解説書（水谷真成・平凡社）によると今のチトラルからマスツージあたり（ダルディスタン）を治めていた国だそうです。記述には「・山や川が入りまじり、小高い丘が或いは高く或いは低く連なっている。穀作は十分に備わり、豆・麦が豊富である。葡萄が多く、・気候は寒く、風俗は性急である。人の性質は純朴で、人々の間には礼儀がなく、・仏法を尊重している。国民は教化され、信仰しないものはない。伽藍は二箇所、僧徒は少ない」と。「仏法を尊重している」と記してはいるけれども、この一帯、

私の目には仏教遺跡や仏像の影すらも目に入りませんでした。

いよいよ今日から玄奘のいう商弥国への旅の始まりです。まずは4日間かけて、チトラルからマスツージまでを走ります。

イスラマバードから北西辺境州のチトラルへは小さなプロペラ機（ATR機50人乗）で有視界飛行で飛びました。フライト時間は1時間足らずなのですが、天気次第では欠航も度々だとか。飛ばない場合は陸路ギルギット、グピス、マスツージを2日間かけて走る予定でありました。この空路1時間と陸路2日間の時間差は、旅の初めにしては後々の旅程に響くことになったはずですが、しかし無事飛び立つことができたのは嬉しい限りでありました。



チトラルのバザール

離陸直後、パキスタン最大のタルペラダムを真下に、間もなく西方の乾いた山間に入って行き、そして、ロワリ峠（3118m）の谷間をすれすれに北上して飛びます。進行方向左側、つまり西側の山を越えればもうアフガニスタンなのです。

チトラル空港は谷間を平らにした小さな空港で、右向こう側は屏風のような秃山が立ちほだかっています。空港ターミナルといっても、殺伐とした寒村



チトラルの靴屋さん

の駅舎のような感じですが。チトラルはパキスタン独立後も王政を布いて、藩主による内政を認めるといふ特別な地域であったのですが、1969年に王政を廃止して一つの行政区となりました。パキスタン北西に位置し、標高1518mのチトラルはアフガニスタンと山を隔てて長い国境線で接しています。市街地は中央アジアとの交易の歴史を有し、同時に中国とインドを結ぶ求

法僧の通るルートでもあったと思われれます。今なお、にぎやかな3つのバザール（商店街）がチトラル河畔を南北にかなりの斜面の道筋に沿って延びています。この道を往復2時間程かけて歩きましたが、周辺小村の人たちの生活必需品など全てまかなえそうな大規模なバザールです。この季節の生鮮野菜や果物そして肉類は豊富にあります。魚介類のお店は皆無でした。靴修理屋さんも目立ちます。やはり荒れた地道を歩くことの多い人たちにとっては大切なお店なのです。地元志向の衣服雑貨類もカラフルで豊富。銃砲店ではピストル類ではなく、砲身の長い銃



チトラルの街角

が何のガードもなく無造作に陳列され売られています。一方、これだけ人通りの多い通りでもやはり女性の姿は女の子も含めてまったく見られません。ここは女性のい



ティリチミール(7708m)とチトラルの町

ない所なのかなと錯覚するほどでした。

街角から遠望するティリチミール(7708m)はヒンドークシュ山脈の最高峰です。この山の特徴は、7000m級6峰、6000m級30峰余りを一つに束ねるような巨大な形を作っています。日の出と共に宿舎を出て眺めました。山全体が朝日に白く輝いている様は眩い限りでありました。丁度、開店準備をしていた靴屋のおじさんが、こっちに向かってニッコリほえんでくれたので、思わず覚えたてのワレイクム・サラーム(おはよー)と返しました。後はお互い乏しい英単語を並べて身振りよろしくしばしの会話。「お、日本人か、私はアメリカ人はダメだけど日本人は好きだ」という内容。人なつっこい素振りから察するに、確かにこっちに好感を持ってくれているなあと感じられました。国の政策がアメリカの後方支援をしている姿勢なのに、国民の感情は違っているようです。このことは、なるほどと後日あちこちで感じるがありました。クナル川にかかる大橋は日本の援助によって架けられたと聞きましたが、旅の途中でも生活

支援や文化財保護で日本が関わっていることが散見されました。こんなことも日本に対して好感度アップに繋がっているのかも知れません。

明日から更に奥地へ、そしてアフガニスタンに接する谷に行くため、警察へ出向いて署長にも面会して届出や警護のお願いをしました。署長室前の事務室に貼ってあった年度別各国からの観光客数を見ると、日本人は毎年1〜200人前後を示していました。因みにアメリカからは2桁代でこの地への観光をひかえている様子が伺えました。

この後、空路のおかげで時間節約ができたので、3つのバザールをぶらつきながら通りを抜け、馬上競技のポロを観戦しに行くことができました。この競技は、イギリスの統治時代に持ち込まれた上流階級の人たちのスポーツであります。地元応援団が笛・太鼓で盛り上げて



チトラルからグンブレット谷へ

いました。帰路、シャンヒー・モスクへ立寄りしました。築100年以上とか。この地域の信仰の中心地であることが伺えました。

北西辺境州のチトラルから グンブレットの谷へ (十月四日・三日)

チトラルPTD C(国営の宿泊施設)を3台のジープで出発。車の外観はアメリカ製のジープですが、エンジンは欧州車のもの、運転席周りは日本車のもので、インドルの真ん中にはトヨタのマークがそのまま残っています。ガイドさんがいには、国際的な部品を使ったわが国の純国産車であると冗談っぽくしていました。なる程1台1台それぞれが中古部



カラージャ族の子供たち

品を使って異なった性能を有する純ハンドメイクな車といえるでしょう。

直ぐに町外れから小高い山を登って行く。昨日は小雨模様だったけれども、今日は晴天。峠から眺めるテイリチミール(7708m)は、白銀に輝き、適当に雲を配置し、手前は先ほど発ったチトラルの町が朝もやの中にかすんでいました。峠を下ってアユーンの村を抜け、ブンブレットの谷へ一気に高度を上げて行きます。道は狭くダートなのですが、さすがタフな特別仕様の車です。日本の軽自動車並みの小柄なジープは身を躍らせて機敏に走ってくれます。対向車が殆どないから気分がいい。1時間ほどでチェックポストに到着。ここから谷が分かれ、右へ行けばランブル谷、左に行けばブンブレット谷です。今日はこのブンブレット谷にあるいくつかの集落のうちの一つカラカール村まで行き1泊することになっています。明日は右のランブルの谷へ入ります。

ヒンドウークシユ山脈の山懐でもあるカラカール村に近づくにつれ、ちらほら人に出会います。人たちで、かつて、アレキサンダー大王が東征してきた時の軍隊の末裔ともいわれています。他の地域では今から100年ほど前に、イスラム教への改宗が強制され、或る所では地名までイスラムに因む名になったそうです。カラシヤの人たちは険しい地理的な条件も幸いしてか古来からの独自の宗教(自然信仰・祖先崇拜)や風習などを今に守り伝えていきます。

この村で印象づけられたのは女性の衣装でした。頭から足までを着飾り、刺繍やビーズなどであしらった装飾品を身につけています。初めは晴着か、はたまたお祭りでも?と思いましたが、そうではなく家事、



カラカール村の旧墓地(無造作に置かれた柩)

す。この村は山奥深く分け入った寒村であろうとの先入観を持っていましたがそのイメージは間違っていました。2日間の滞在中に感じたことは、生活は厳しく楽しみごとの少ない所とは思われませんが、人々は素朴で顔立ちも柔和。自分たちの生活や文化を大事にしながら日々を楽しんでいるようでありました。



小川でお洗濯

西側にはヒンドウークシユの一部、赤茶けた丸裸の山々が立ちはだかつています。それを越えればアフガニスタンなのですが、ここは全くの楽園といった感じですが。戦火の影響のない人たちの顔は穏やかです。それでも用心にと、今日明日と大きな銃を手にした警察官が車に同乗して警護してくれることになりました。

ランブル谷とブンブレット谷に住むのはカラシヤ族の人たちです。肌は白く、青い目を持つ

畑仕事、川での洗濯、登校中...など日常的に着用しているのです。幼児からお年寄りまで、女性すべてが彩色豊かに着飾っています。女性の集まるところは実に華やいていました。しかし男性はというと、子供からお年寄りまで年齢関係なしにシャワール・カミスというパキスタン一般男性の着用するワンパターンの簡素な衣服を着ています。それに子供は、遊んでいる時も学校にいる時でもパキスタン国旗の色と同じ緑色の野球帽をかぶっており、額のところには白字でPAKISTANと染められています。男性はパジャマのように上下を着用すればいいだけ、女性の毎日の身だしなみは、さぞかし大変だろうと思いますが、お化粧として案外楽しみながらの習慣なのかも知れません。

谷の奥には、女性の生理時などに家族から離れておこもりするパシヤリ小屋があり、3人の女性はフエンス越しで私たちと気楽に対応していました。この小屋が目新しくなったのは最近のこと。女性の人権を考慮されるようになり、外部からの援助を得て改善されたとのことでした。

村の狭い通りには子供からお年寄りまで結構な人通りです。チトラルと違って女性も男性と同じように外に出ています。みんな屋外で過ごすことが楽しいようです。男の子たちは、かつて私たちが興じたようなビー玉遊びを道路でやっています。

パシヤリ小屋前に架かる20m程のつり橋を渡ると、昔の墓地がそのままに残されていました。乾燥した気候のためなのか、お棺も、そして真っ白になっている人骨もすっかりと原形を残し、野ざらし状態になっていました。土地の少ない村のこと、人が亡くなると、次々と同じ所にまとめて安置したのでしょうか。お墓参りをしているという形跡はまったく無く、お棺と人骨が無造作に、しかも過密な状態で放置されてるがごとく置かれていました。

今夜はブンブレットPTDC泊。ドラム缶を改良した薪ボイラーで沸かしたお湯は温度・量共にシヤワーには不足で体が震えました。明後日、私たちが去った後、この施設は明春まで閉館とのことでした。

ブンブレットの谷からランブルの谷へ

(十月五日・四日目)

ブンブレットの谷を少し下るとアネーシユ村。道路沿いに小学校があります。丁度、朝礼の間で子供たちが校庭に集っていたので立ち寄ってみました。学校といっても瀟洒しょうしゃな建物で教室が別棟も含めて5つほど、室内には机も椅子もありません。斜めに3本足で立てかけた黒板があるのみです。校庭は変形ですが50m四方程できれいに整備されていました。そんな校庭で50人程の子供たちが、校則のような言葉を年長の子供に合わせて唱和していました。その後、校歌なのでしようか合唱して朝礼を終えました。

先生も生徒も男性はシヤワール・カミースを着ていて単調な服装ですが、女性は民族衣装で全身着飾った服装で登校していました。小さな子供たちの、しかも華やいだ服装を着て、はつらつとした歌声を耳にしていると自然と心が和んできます。服装で明らかに判る何人かのイスラム教徒の子供たちも仲良く勉強しています。授業の邪魔になつてはと全員で記念撮影をして

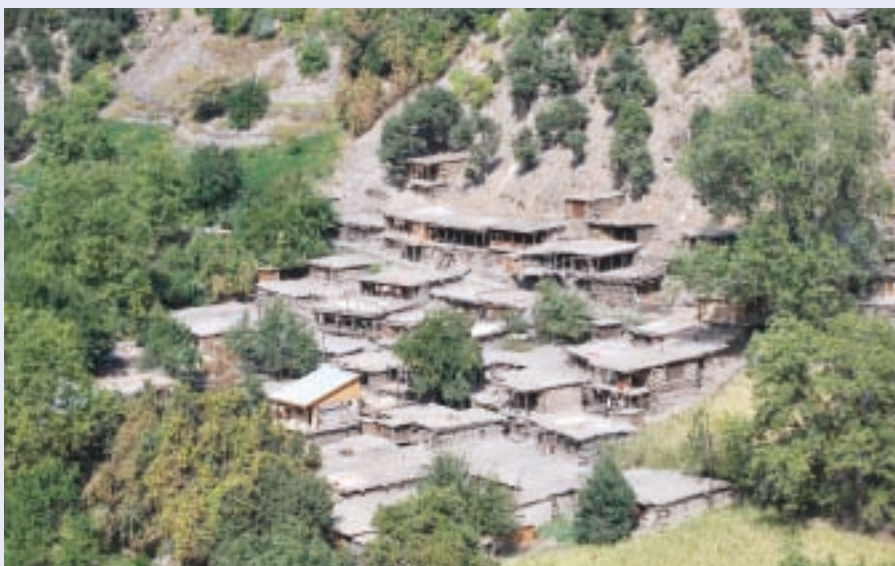


アネーシユ村の小学校の朝礼

お暇しました。帰り際、授業が始まった各教室を見てみると、どの教室でも10人程ずつ床に教科書、文具などを並べて授業を受けていました。この地の教育施設の環境は良くないと思います。が、パキスタンは義務教育が徹底していて、一つのクラスでは英語の授業をしていました。小学校から既に英語教育を取り入れているのには感心させられました。ついつい日本の教育や子供たちのことをあれ

ちのことをあれこれ詮索してしまいます。

昨日通過したチェックポイントを通りランブル谷へ直行。ブンブレット谷より規模が小さ目を感じましたが、村の機能としては整っているよ



ランブル谷のバラデシユ村(マハンデオ神殿から望む)

うです。村に入るとジヤスダック神殿がありました。神殿といっても20m四方の中はガラんとした建物で、床は無く土間となっています。ここでは冠婚葬祭の式場になったり、村人の集会所になったり、そして



護衛のおまわりさんと

日本の神棚のようにマハンデオという土着の神様を祀っています。この日、訪れてみると、片隅に板を並べ、ベンチを作って5・6才の子供たちがお話しききものを聴いていた最中で、保育園といった雰囲気でした。日本の公民館のような施設といえます。

この谷のバラデシユ村には日本人の和田晶子さんという方の住まいがあります。訪問すると丁度ご在宅、日本と行き来してこの村のことを外に伝えたり、村の生活改善ほか伝統文化の保存などに努め、この地に様々な貢献をされているとのこと。本来は写真家だそうで、写真集も

見せていただきました。今や、カラシヤの人たちにとっては頼れる大切な人となっています。通りすがりに、村のおじさんから採りたてのブドウをいただいたのです。丁度、私のリュックに日本からのお菓子の寄せ集めを入れていたビニール袋があったのでそのまま差し上げました。リュック内で押しつぶれた饅頭、粉々になったお菓子、クッキー、飴玉など、失礼かなと思いがながらもこっちの気持ち伝えて渡しました。受け取ってくれたおじさんは、その場に居合わせた10人程の幼児からお年寄りまでおかき一片まですべておんぶされてる赤ちゃんにまで分け合ってくれていました。その光景はささやか



マハンデオの神殿(ランブル谷)

でも平和で、分かち合う食平等の微笑ましい気持ちたちが伝わってきました。

パキスタンではイスラム教を国教としているため、国内どこに行ってもイスラム教を信仰している雰囲気だによっています。静寂な宿舎にも、毎朝6時、谷間のスピーカーから驚くほどの大音声のコーランが聞こえてきます。一日の始まりなのです。様々な教えが生活パターンに組み込まれて毎日が安心でいられるのでしょうか。しかしこの谷のもともとの信仰は多神教なのです。谷のあちこちに聖域が存在しているようで、今でも、うかつには立ち入ることができない場所があります。そして一年の始まりから12月のお祭りチヨウモスまで独特な宗教行事があるそうです。だからイスラム教徒からは、カラシヤの人たちのことをカーフィル(異教徒)とも呼ばれています。

土着の神様が鎮座しているというマハンデオ神殿に行きました。村中から急斜面を四つんばいになって登りつめたところにありました。そこからは村全体が見渡せ、5平米ほどの広場に



お当地料理の昼食(カラカール村)

なっています。神殿といっても岩場に木製のちよっと細工しただけの板がフェンス状に並べられているだけのものですが、村人にとっては村全体を守る神聖なるご神体なのです。

お昼は再びブンブレット谷のカラカール村にもどつて、村の中ほどにある民家のお宅で地元の家庭料理をいただきました。今、収穫中のクルミやチーズ入りのタシリーというパン、豆の煮込み、ゆでたジャガイモ、そしてブドウ、リンゴなど。秋の食材を使った味付けは脂っこくなく塩味を生かしたさっぱりした料理でした。因みに各お家では地元でとれる杏、桑の実で自家製のお酒も作っているそうです。公には禁酒ですが家庭では結構楽しんでるようです。

夕方、カラカール村で子供から大

人までの女性による伝統の踊りを見せてもらいました。村の女性全部出てきてくれたのかと思うほどの人たちが集まりました。テレビもなく、他にも楽しみごとのないこの地域の人たちにとっては、村中で踊ることが娯楽であり、また連帯感を生み出す術なのかもしれません。常着そのままでの踊りの輪ではありませんが、もともと色鮮やかに着飾っている女性たちです。横笛と太鼓のリズミカルな歌に合わせた踊りは軽快で華やいだものでした。

ブンブレットの谷からマスツージへ

(十月六日・五日目)

午前中をかけて、一昨日あえぎながら上って来たブンブレットの谷間を溪谷沿いに下ってアユーンからチトラルへ、初日に泊まったPTDCで休憩と昼食。メニューの一つ、コフタというゆで卵入りのハンバーグをトマトソースで煮込んだ伝統料理はおいしいものでした。食事中、私たちの前に出てきたコックさんに思わず有難うの気持ちをこめて拍手を送りました。



トウモロコシの収穫(ランブル谷)

午後はひたすらクナル川に沿って北上しました。荒々しい谷間の中腹を砂ぼこりを立て、小石を巻き上げながら進むこの道は幹線道路なのです。途中チェツクポイントで名簿や顔のチェックを受けながら、いく

つもの村を通過。クログの村でクナル川がマスツージ川と名が変わります。上流方向は東に進み、ブニ村(2012m)そしてサノガル村(2363m)を過ぎ、ここでマスツージ川の支流であるラスプール川を渡らなければならないのですが、吊り橋が3ヶ月前に2台の車もろ共落下したとのこと。橋が無いためいったん川床に降り、板を並べただけの仮橋を1台ずつ慎重に渡らねばなりませんでした。3台とも無事渡り終えたので



マスツージ川を上流へ

すが、思いがけないトラブル、それはがれきのような石だけの川床を走ったため、オフロード用のジープとはいえ私の車の右前がパンクしてしまったのです。

先頭の車は行ってしまいました。後続車の運転手2人の慣れた手つきで、あつという間にタイヤ交換をすることができました。各車には無線機を持っているので、間もなく先導車を呼び戻すこともできました。次にまたまた、細い道でトラックがガス欠で立ち往生しています。皆で押して適当な路肩まで寄せ、午後6時半、約12時間の行程で、暗くなったマスツージのPTDCに入りました。

マスツージの海拔は2378m。季節的にはもう冬です。外は薄い氷が張っています。ほこりにまみれた体を拭きたいけれども、もちろん風呂はないし、湯や水まわりも十分でない。流したトイレの水が部屋にまで入ってきます。排水ができていません。行をするつもりで何とかほこりまみれの体を拭き、やっと気分を取り戻すことができたのです。傾斜地に並んだ部屋

からの景観はさぞかし美しいと思うものの、今はただ暗い静寂の中に、見上げなくても目線で見える夜空にキリッと輝く無数の星が散りばめられているだけでした。今夜は2人の警察官が同宿してくれました。ここを地図で確かめたところ、アフガニスタンに通じる5km級の峠が10を数えてありました。国境に近いということで警護してくれたお陰で安心して就寝することができました。

玄奘のいう商弥国の最北端をマスツージとす



早朝のブニ・ゾン(6551m)

るならば、この地から北方向にあたるパミール高原(タジキスタン、ウズベキスタン、中国にまたがる世界の屋根といわれる高原)のことを述べています。商弥国の「国境より東北へ山を越え、谷を渡り、危険な道を通って行くこと七百余里で波謎羅(パミール)川に至る。…二つの雪山に位置しているので寒風は凄じく、春夏も雪を飛ばし、昼夜も風を吹きつのらせている」と。この二つの山のうち南側の山は、パキスタンの最北西に位置するヒンドウークシユ山脈のことではないでしょうか。地図を広げて確認してみると、玄奘が人から伝え聞いた話にしては的を得た記述であると納得できます。

また、文末には「波謎羅(パミール)川より南して山を越えると鉢露羅国(バルティスタン)がある。金・銀が多く、その金の色は火のようである」と。金銀のことについては金銀鉱がどこにあるのか知り得ませんでした。旅の後半にこの地を訪れたとき、川岸のテント住まいで砂金を採取していた一団を思い出すと、そのことかな?とわずける部分もあります。

マスツージから シャンドール峠を経てグピスへ

(十月七日・六日)

今朝は日の出前に出発しました。宿舎より南西方角にブニ・ゾン峰(6551m)の頂が、今まさに照らし出そうとするかすかな朝日に輝き、そして澄み切った中天にはまん丸い月が浮かんでいました。

昨日、川岸走行中にパンクしたラズプール川を南方方向の上流に向かってひたすら走ります。幌をかけただけの車内には寒風が肌を刺します。1時間半後、ようやく日が上がってきました。連なる山には木々はないけれど、川岸にはポプラなど落葉樹が黄色く色づいています。景色を満喫したいため、寒いのを我慢して幌をはずしてもらい視界が一気に広がりました。ハルチン村(2872m)を過ぎた後、ソル・ラズプール村(2994m)から進路を東へとり、ポリス・チュックポイントを過ぎ、シャンドール峠(3734m)へ一気に高度を上げて行きます。道は小柄なジープしか通れません。この峠で北西辺境州と別

れノーザン・エリアへ入ります。峠一帯は、普通の峠のイメージと違ってシャンドール湖があり静かな湖面が広がり、かなり広い場所となっています。ここで、北パキスタンで人気のあるポロの優勝戦が、年一回戦われるそうです。こんな不便な所で、しかも富士山ほどの薄い空気の中で、そして観客が1万人余りも集め、大統領も観戦するとか…。峠は両州の境目だとの大義名分のためなのでしょうが、一時的に熱くなるこの地は今、人影が全くない澄み切った冷たい空気の中に紺碧の湖面を漂わせていました。



ラズプール川を上流へ

峠を下り西へ、バラサト(3353m)を過ぎ、グロウ村で昼食。ここは名ばかりのドライブインです。しかも食事の用意ができず、急ぎよ、ガイドMさんとドライバーさんが有り合わせの素材で料理を作ってくれました。私は高山病の兆候なのか食欲不振。収穫されていたゴルフボール程の小さなリングを食しただけでした。この時、初めて持参してきたゼリー状の栄養食を口にしました。

道路はギザル川に沿ってグピスまで通じています。食事の待ち時間中に川辺に行きましたが、インダス川などのように灰色の流れだろうとの先入観を持っていましたが、全く逆で、4000m級の山を源とする透明な水は川底がはっきり見通せる澄みきったものでした。だからでしょう下流のカルティ湖では鱒を養殖していると聞きました。この後、パンダール近くの学校を通り過ぎる時、車を止め、道を歩く男女の高校生とも話を交わすことができました。夕刻グピスの町に入る手前のプニアル谷にあるカルティ湖畔のPTDCに到着しました。そばにいた二人の宿泊客が



シャンドール峠(3734m)

私たちに言いました。「あなた方がいなかったら今夜はどうなっていただろう」と。私たちの予約がなかったらここは来春まで閉館だったからです。道筋には全く何もない荒れた山間地帯です。彼らはお陰で路頭に迷うことなく、私たちと一緒に宿泊できたことを喜んでいました。私たちは地獄の中の仏だったのかも知れません。因みにこのあたりのことについては「西域記」での詳細な記述はなく空白地帯になっているようです。

グピスからフェアリー・ポイントを経て フェアリー・メドウへ (十月八日・七日目)

朝6時半出発。ヤスイン谷で休憩。谷間なのでまだ薄暗くて寒い。幌の隙間から強い寒気が体を冷やします。車を止めドライバーさんたちは枯れ草を集めてたき火をしてくれました。更に、溪谷を西へガクチ、シンガール村、そしてギチ・チェックポイントを順調に通過しましたが、シエルトのチェックポイントで警察に止められてしまいました。北側はもうギザル川ではなくギ



ナンガパルバット(8126m)(ライコット・サライから望む)

ルギット川と名を変えています。私たちの後方には次々と車が止められています。警察は警護と保安のため20台ぐらいのコンボを組んで走れと言っているのです。ギルギットから来る先導の警護車を待つこと1時間近く、着後は一団となって猛スピードでギルギットへ向かいました。

今日は、ギルギットを素通りしてカラコルム・ハイウエーに入ります。この道は、中国のカシユガルからパキスタンの首都イスラマバードの西にあるハッサンアブダルまでの1300kmを結ぶ世界最高所のハイウエーです。1966年に着工して79年に開通しましたが、現在全面改修中です。これからの道中はほとんど、ハイウエーを走るといふよりはダートなオフロードをあえぎながら埃まみれで歩むといった感じでした。

カラコルム・ハイウエーを南下してライコット橋を渡ります。ここから



氷河畔を馬でフェアリー・メドウへ

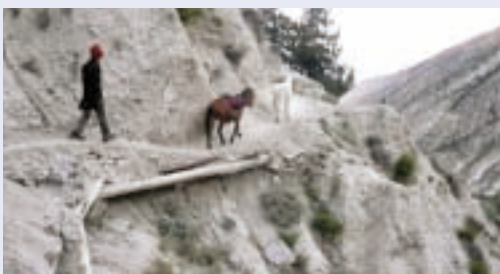
はヒマラヤ山系最西端に位置するナンガ・パルバット(世界第9位8125m)の麓を目指します。ここで今までのジープから山岳専用のジープに乗り換えました。部品寄せ集めの車のこととて、ブレーキが効かなかつたら、スリッパしたら、運転を誤つたら...など不安が頭をよぎってきます。予想を超える荒れた山岳オフロードを、千尋の谷を思わせる山腹の狭い道を1時間程かけて山中のジェル村に着きました。別の名をフェアリー・ポイントといいます。ここからは歩くほかにありません。ポーターに荷物を持ってもらい馬にまたがってフェアリー・ポイントからフェアリー・メドウに向かいます。標高差640m、距離6km。険しい山道を始めて乗った馬に振り落とされまいと、体をこわばらせながらヒマラヤ杉などが茂る山道を2時間程かけて上りました。少し上ると突然ナンガ・パルバット北面の真っ白な偉容と氷河が目飛び込んできました。ああ、来たなあ、って感じです。

この山は地元では「裸の山」とも呼ばれ、語源はサンスクリット語によるそうです。約1500

年前には中国からインドへ求法する僧たちも、自分の位置確認のため、遠くから必ず目にしていました。ここから

です。

途中から雪が降ってきて先を案じましたが、無事フェアリー・メドウに着きました。ここは3300mの所です。そこから



フェアリー・メドウへの登山道

は、ナンガ・パルバット主峰(8125m)、そして連なるシルバー・ピナクルズ(7597m)、ライコット・ピーク(7070m)、ガナロ・ピーク(6606m)、が一望できます。北面から流れ出ているライコット氷河も麓から目前にまで雄大に広がっています。ひと夏過ぎしてきた氷河だからなのでしょう、表面の色は砂利など巻き込んでグレーにくすんでいます。

窓からその威容を眺めることのできる山小屋

フェアリー・メドウからトレッキング

(十月九日・八日目)

2日目、まずまずの天気ながら、早朝に輝くナンガ・パルバットは荘厳でした。今日は、ナンガ・パルバットのベース近くのベイヤルまで登ります。昨日乗った馬にまたがること1時間半。

ヒマラヤ杉や灌木の中を抜け、眼下に氷河を見ながら、ガレバの道なき所を選びながらの行進でした。途中、雪が降り出してきて足元を悪くしましたが、見渡す



ライコット氷河

チしていました。

馬を信じ命を託しながらの行進は、この旅ならではの経験でした。険しい山すその幅50cmにも満たない道を登ります。馬もろとも氷河の谷底に転げ落ちないことを祈りながら…。道中下山して行く登山家グループと、冬に向かって牛舎に戻る牛たちとすれ違いました。



ライコット・サライのキッチン

目をやると、ライコット氷河が麓から流れだしているのが見渡せました。ここから更にガリという尾根(3800m)まで行く予定だったのですが、天候がにわか悪くなって真冬並みの雪模様。山岳ガイドMさんの判断で引き返すことになり、帰路は歩いて道中を楽しみながらフェアリー・メドウまで帰りました。

夕刻には天気が回復し、朝に見た姿とは異なつたナンガ・バルバットをサライのペランダから飽くことなく堪能していました。また、この夜に見た満天の星空は見事でした。

フェアリー・メドウからラマまで

(十月十日・九日)

ベイヤルの山小屋でトゥモロティーというフンザで飲まれているハーブティーと甘いお菓子を食べ、疲れを癒しました。ここからは馬にも乗れません。薄い空気の中を一步一步呼吸と足を合わせながら登って行きます。荒々しい牧草地を抜け、3667m、ライコット・サライからの標高差167mの所に立ちました。そこはナンガ・バルバットの全容とチョングラーI・II、ブルドウルピーク、ライコットピークなど、そして足元

快晴。下山はフェアリー・ポイントまで、しかし距離があるので初日以来の馬に乗りました。背後にはナンガ・バルバットの全容が、白銀に輝いて眩い光景を見せていました。何回も振り返り、馬を下りてその景色を瞭に焼きつけ別れを惜しみました。フェアリー・ポイントから北方を眺めるとハラモシュ(7409m)ほかフンザの



フェアリー・ポイントから望むフンザの山

山々が純白に眩く輝いていました。待機させていた山岳ジープに乗り換え、一昨日あえぎながら上つてきた山肌の道を下ります。出発して間もなく直ぐ下に白い湯気を見ました。この地には珍しい温泉が湧いている数軒のタトー村です。温泉はほかにもう一箇所、山を下り、カラコルム・ハイウエーに入った所に湧いています。そこは道路の傍で、湯量も少なく施設などはないのですが、温泉がこの地でも出るんだとの興味に誘われ後日立寄ってみました。

山を下りるとインダス川に架かるカラコルム・ハイウエーのライコット橋です。橋詰のシャングリラ



ライコット川の谷を下山



朝日に輝くチョングラ(6830m)

うちちに宿舎を出ました。快晴で、オレンジ色の朝日で眩いチョングラの峰々を背にして出発しました。山を下り、にぎやかなアストールの町を過ぎ、昨日通ったアストール川沿いの道を更に上流に向い、グリコットまで進みました。そこから支流のダスキラム川(アストール川)をやや南へグダイ、ダス村を過ぎチラムに着きました。ここチラムに入ると3差路になっており、左はデオサイ高原方面へ、右はブルシル峠(4198m)を経てインドカシミール地方に通じています。左右の道に挟まれるように軍事基地があります。この基地はパキスタンでも規模の大きなもので、周りを有刺鉄線で囲んでいます。勿論カメラは禁止ですが、兵舎には兵士が、大学のキャンパスにいる学生のように珍客の私たちを一斉に見てい



アストール川の「渡し」

ホテルで山岳ジープから乗り換えて、7日目に走ったルートを引き返すように北へ走ります。インダス川の支流であるアストール川の合流点ジャグロットでインダス川を東に渡ります。灰色の水を流しているアストール川に沿い、東南の上流に向かって走ります。ちょうど、今日登った北面のナンガ・パルバットを回り込む位置になり、南面のベースキャンプに通じる道でもあります。

道中、ドイアン、アルチュなどの村を通り、やっとなんといった感じで、アストールの町に着き、昼食を兼ねてこのバザール(商店街)を歩きました。周辺村々の一番の繁華街なのでしようか、にぎやかな街中でした。でも、やはり街中では女性の姿は見られません。岩塩を部屋いっぱい積んで売っていた店がありました。ミネラルを多く含んだ貴重な塩の塊です。まるで石垣に出来そうな



20~30kgの岩塩

ブロックです。旅の思い出に岩塩のかけらをリュックに忍ばせました。また、店頭でこの地では珍しい柿を見つけ、添乗さんが買ってくれたので食べてみました。が、渋くてだめでした。なんでも原産は日本だとのことで「ジャパニール」と呼ばれていました。聞きそびれてしまったのですが、ここではどのようにして食べるのでしょうか。

後、6km、30分程で、3150mのラマに着きます。この村は、チョングラの3連峰を西方に望むことができます。3つのそれぞれの高さは、6830m、6455m、6447mです。宿舎のPTDCはヒマラヤ杉などの林の中にあつて美しい建物でしたが、私たちが最後の宿泊者で明日から明春まで閉めるとのことでした。着後、林を抜け、チョングラの麓に近づこうとしたが、空気が薄く、息切れして苦しくなってきたので引き返しました。

ラマからデオサイ高原を越えシガールへ

(十月十一日・十日目)

今日の行程は距離があるというので、まだ暗

ました。ここは対インドと向き合っている最前線の基地なのです。インドカシミール地方にカルギル村があり、そこを中心に1999年、カルギル紛争が起きたのです。核実験をした後、定かでない国境、つまり実効支配線(停戦ライン)を境にしてお互い戦争状態になりました。多くの戦死者を出し、未だ解決するどころか、今年2月22日の報道では「インドへの核関連資機材の解禁をするならば、自分たちは核保有国を維持する。」という内容を伝えていました。過去、カシミール地方をめぐるカルギル紛争を含め、3回も戦争をしているのです。核といい、戦争といい、そしてかけがえない命まで粗末にしてしまう戦死といい、これらの無駄を国内の平和のために向きをかえれば、決して豊かだとは言えないこの国にどんな幸をもたらしてくれるであろうかをつくづく考えさせられました。

西側の殆どの国境線がインドと接しています。インドのカシミールへ通じる峠道は、私たちが旅したノーザンエリアだけでも二十を数えます。しかも、どれも4000m以上の標高を持つてい



デオサイ高原のスアル湖(4015m)

ます。かつて、これらの峠道は天竺へ往来する法顕や玄奘のみならず多くの求法僧にとってはどうしても超えなければならなかった自然の関所だったのです。

玄奘は、西域記の中で迦湿弥羅(カシミール)国と記し、パキスタン側の5000m級の峠を越え、628年(一説には631年)にインドスリナガル郊外の西門からこの町に入っています。(慈恩伝に記)、そして即位間もない王の歓待を受け、護瑟迦(フシュカ)寺に泊まり、数日後に闍

耶因陀羅(ジャインドウラ)

寺に入つて2年間学んだと伝えていきます。

この2年間に玄奘は具舍論(クシャロン)を研究したりサンスクリット語の経典を漢訳

したり、またこれまでの漢訳標記を訂正したりして充実した日々をすごしました。因みにカシミール国のことを「・学問を好み、よく勉強し：伽藍は百余箇所、僧徒は五千余人：それぞれに如來の舍利が一升入り入っている」と。カシミール、スリナガルに通じる道は4つあつてひとつは通行禁止、あとは吐蕃(チベット)、勃律(バルティスタン)、乾陀羅(ガンダーラ)に通じると後の8世紀末の書に記されています。後記しますが、この時代、ペシャワールを中心としたガンダーラは衰退の一途を辿っており、玄奘もその様を西域記に記しています。

今日からチラムを基点として東に進みます。道中思わぬ所に仏跡が見つかるのです。今回の旅ではインドに入っていないのですが、現在の国境を考慮に入れることがなければ、北インドとして同じ地方ないしは国であり、カシミールのことを記さなければなりません。例として、私たちが後日17日目に訪れる都市遺跡タキシラのことを玄奘は「：最近はまだ、迦湿弥羅国(カシミール国)に臣従している。」と書いてい



バラバニ(大きい川)の吊橋



シガール渓谷上流K2方面を望む

ることなどからです。

チラムで道を左へ、警察のチェックを受けデオサイ高原へと上って行きます。国立公園の立て札には熊がいることが書かれていました。この道は、ジープ サファリ トレッキングオンリーと地図に書かれている通りダートで急勾配の道でした。チャクル峠(4266m)を越えた途端、視界が一気に広がり、スサル湖が見えてきます。湖面は紺碧にして澄んでいて静寂そのもの。周囲には人影は全く見当たりません。小休止の後、更に進むと枯れ草で敷き詰められた起伏のあるデオサイの高原が広がっています。夏には高山植物などが花をつけ美しい高原になります。起伏の谷間には流れが幾つもあったり、その度に車はしぶきをあげて渡って行きます。今は水の少ない季節で容易に渡ることができそうですが、一カ所だけ幅30m程の川があり水量も多い所なので吊橋がかけられており、1台ずつ3台を慎重に渡しました。この道は4100mの厳しい峠道であっても東西を結ぶ大事なルートなのでしよう、時々、屋根に荷物を満載し、すし詰め状態の乗

り合い四駆車とすれ違ったりします。

峠を下りサトバラ村を見下ろすと、少ない耕地は段々畑で埋め尽くされています。直ぐ下流では大規模なスカルドウ・ダム建設が進んでいました。2010年の完成とのことですが、ちょっと難しそうに思えました。夕方近く、全身ほこりまみれでスカルドウの町に到着。この地方では大きな町で、町の機能が整っているようです。

ホテルのレストランで休憩、身支度を整え1

時間程かけてイ

ンダス川のほぼ

上流の吊橋を渡

り、支流のシガ

ール渓谷に沿っ

てシガール・フォ

ートに入りました。

この宿舎は

シガール歴代王

の居城であった

ものを修復して



シガール・フォート(城郭)

ホテルに改修したものです。だから、どの部屋も間取りが異なっています。この地方では高級ホテルとして知られており、料理もバルティスタンの郷土色いっぱい丹精込めたもので、久しぶりにご馳走にありつきました。

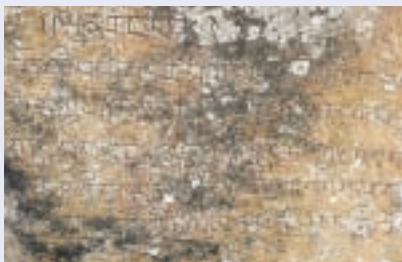
シガール滞在

(十月十二日・十一日)

朝のシガール渓谷を右に見ながら昨日走ってきた道をスカルドウの町まで引き返します。この町はインダス河畔にあつて周辺の中心的な都市となつてにぎわっています。この地方は16世紀頃、ムガル帝国に組み込まれ、バルティスタンと呼ばれていました。4〜5世紀に仏教が伝わったのですが以後イスラム化が進みました。8世紀ぐらいまではチベットの一部分であり、カシミール地方への要所でもあつたことから、求法僧の往来も盛んであつただらうと想像できます。現在もチベット系の人たちが多く住んでいます。だから、チベットの習慣や祀りごとのしきたりが残っており、ツアンパというチベット食を今も常食にしているそうです。



サトバラ石仏(上部)



サトバラ石仏の経文(下部)

て、僧徒も沢山いたけれども戒行は既に濫れていると指摘。仏教が行き届いていた時代は既に過ぎ去ったことを物語っています。

予定に入っていなかったのですが、デオサイ高原方向に5km程上った所にサトバラの石仏があると聞いたので、別ジープをチャーターして訪れました。石仏は、8世紀頃のもので目測で高さ10m、底辺8m程、三角形をした一枚岩を中心に仏陀、周囲に諸仏が彫られ、また、底辺には経文らしきカロシティー文字が見え、高台からスカルドウの方向に向いています。スカルドウは、また世界第2のK2(8611m)や、バルトロ水河へ行く拠点の町でもあります。

(次号へつづく)

玄奘は、西域記の中でバルティスタンとはバルティ族の住む国とし、鉢露羅国と書き「：大雪山(注・ヒマラヤ)の間にあつて：麦・豆が多く金銀を産出する。・文字は概ね印度と同じであるが、言語は諸国と異なっている。伽藍は数百箇所、僧徒は数千人在る。学ぶところは専ら何派ということもなく、戒行は多く濫(ミダレ)ている。」と書いています。水谷真成注釈によると「言語はチベット語であり、今日も甚だ古い形を保存していると言われている。」と述べています。また、その当時は、まだ、伽藍も相当数あつ

(お断わり)

文中の大唐西域記の引用文と訳注は、玄奘著・水谷真成訳注『中国古典文学大系22』(1971年11月、平凡社発行)から引用させていただきました。ありがとうございました。

教化活動委員会活動報告

教化活動委員会委員長 佐分宗順

本年度の研修会は後半期に予定しておりますが、詳細は未定です。決まり次第ご案内いたします。また相国寺、金閣寺、銀閣寺のホームページ更新作業は現在進行中ですが本年中には完成の見込みです。今しばらくお待ちください。

◆講義録出版案内

昨年三月から七月にかけて開催いたしました、松岡正剛氏の講座「世界と日本の見方」の講義録『西の文明、東の文化―資本主義と仏教の背景』を刊行いたしました。

『西の文明、東の文化―資本主義と仏教の背景』

松岡正剛著

本書の内容

第一講 グローバリズムと日本

第二講 一神教と多神多仏

第三講 編集的世界観



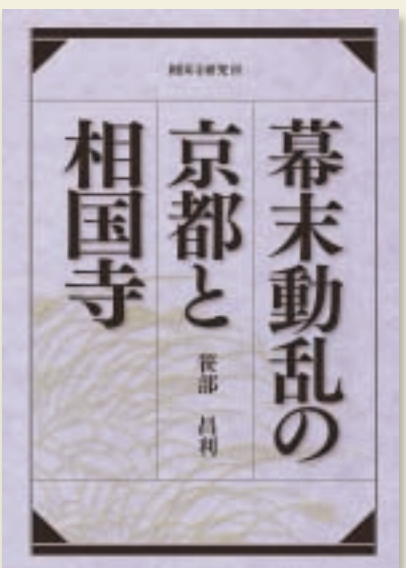
相国寺研究では昨年後半期に開催いたしました
笹部昌利氏による『幕末動乱の京都と相国寺』を刊
行いたしました。

相国寺研究四『幕末動乱の京都と相国寺』

笹部昌利著

本書の内容

- 第一章 京から見た幕末の世
— 黒船来航から安政の大獄へ —
- 第二章 薩摩藩島津家と相国寺
— あらたな政治拠点の登場 —
- 第三章 京の「志士」であるということ



申込先

相国寺教化活動委員会

〒六〇二一〇八九八

京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町七〇一

電話〇七五一一三二一〇三〇一

FAX〇七五一一二二二三五九一

ホームページ(<http://www.shokoku-ji.or.jp>)

研修会講義録ご希望の方は右記宛先までお申し込み
ください。

(24頁からの続き)

○定期宗会

三月五日、平成二十一年度定期宗会が本山会議
室で開催され、鈴木元拙師(四教区向陽寺住職)が
議長に選ばれ平成二十年度本派決算報告、二十二
年度本派予算案が承認可決され、また相国寺本山の
平成二十年度決算報告、二十二年度予算案、並びに
承天閣美術館の平成二十年度決算報告と事業報告、
二十二年度予算案と事業計画案の報告があった。

○春秋巡教

本派布教師による二十二年度定期巡教は松本憲
融師(六教区光明寺住職)が三月十七日(二十六日
に主に兵庫県豊岡市内や美方郡の大徳寺派寺院を
九ヶ寺、天龍寺派寺院を三ヶ寺、南禅寺派寺院を
二ヶ寺、また石崎靖宗師(四教区海岸寺住職)が三
月十二日(十九日)に京都府丹波地方の南禅寺派寺
院十一ヶ寺、東福寺派寺院四ヶ寺で布教した。

○焼骨灰法要

三月二十三日、本山方丈において、京都中央齋
場・宇治市齋場主催、京都仏教会、京都中央葬祭業

協同組合協賛により春季骨灰法要が厳修された。
開式に先立ち江上宗務総長が法話をを行い、その後
管長を導師に内局全員が出頭した。今年も千人を
超す遺族や関係者が焼香に訪れ、心静かに故人の
冥福を祈った。

○瑞林寺夢窓国師毎歳忌

三月二十八日、三教区瑞林寺(長谷寺高山宗親住
職兼務)では開山毎歳忌が厳修され江上宗務総長
と矢野教学部員が拝請を受け出頭した。

(関連記事63頁)

○若狭相国会少年研修会

四月一日、平成二十二
年度若狭相国会少年研
修会が、本山方丈におい
て行われ学童四十六名、
寺院七名、役員五名が参
加した。登山した少年少
女たちは、江上総長の法
話を聞き、坐禅を体験し
た。また参加記念として



本山より数珠とクリアファイルが贈られ、別室にて本山女子職員お手製のカラーライスを頂いた後、鹿苑寺を拝観して無事帰路に着いた。

○止々庵老大師慈明忌・拈華室老大師大祥忌

四月十五日、僧堂(大通院 小林玄徳住職)において、田中芳州老大師(拈華室)の大祥忌(三回忌)、梶谷宗忍老大師(止々庵)の慈明忌(十七回忌) 宿忌が小林玄徳老大師(韜光室)導師のもと厳修された。明けて十六日は本山法堂において止々庵老大師慈明忌半齋が管長導師のもと厳修された。両日とも国泰寺派澤大道管長、南禅寺僧堂師家日下元精老大師(十五日)出頭、南禅寺派光雲寺住職田中寛洲老大師、江上宗務総長はじめ一山尊宿、大通会、縁故寺院、在家の方々約百二十余名が参列し、楞嚴行導・塔参諷経が行われ、法要後の齋席では両老大師の遺徳を偲んだ。(関連写真は巻末カラー参照)

半齋香語は左の如し。

拈華室大祥忌

音容一隔隣三年 音容一たび隔てて、隣三年

○前堂転位式

五月二十一日、本派六教区良福寺(芝原一三兼務住職)徒弟近藤永進師の前堂転位式が挙行された。師は長年本派僧堂で修行、研鑽を積まれた。現在は同寺住職として布教活動に務めている。新たな宗風挙揚が期待されている。



豎起拈香献法筵 拈香を豎起して、法筵に献ぐ
往事追懐都夢幻 往事を追懐すれば、都て夢幻
真前謝怨咽芳煙 真前に怨を謝し、芳煙に咽ぶ
右 紹徳九拜

止々庵慈明忌

萬年王法不傳々 萬年の王法、不傳の々
興盛曹溪滴々禪 興盛す、曹溪滴々の禪
水月空華弗留跡 水月空華、跡を留めず
偉光照徹界三千 偉光照徹す、界三千
定中昭鑑 頼底九拜

○臨黄合同高等布教講習会

五月十一日(二十五日まで)妙心寺派本山内微妙殿において、第三十五回臨黄合同高等布教講習会が開催され、二教区竹林寺住職牛江宗道師が参加した。師はすでに布教師の資格を修得されているが、さらに研鑽を重ねるべく毎回参加している。尚開会式には江上宗務総長、佐分教学部長が出席した。

拝塔香語は左の如し。

新陰山中萬年風 一炷香煙法道通
大事因縁燈火閃 祖宗脈々正玲瓏

○慈照寺開山忌

五月二十一日、慈照寺(平塚景堂執事長)では開山忌並びに開基足利義政公の諷経が厳修された。法要に先立ち当寺華務花方 佐野珠實氏による献花が行われ、引き続き有馬管長を導師に国泰寺派管長猥下、聖護院門跡管長猥下、韜光室老大師、江上宗務総長、長沢京都仏教会事務局長はじめ一山尊宿により諷経がなされた。

慈照寺では銀閣屋根葺き替え工事、二層内部の修復補強工事が完了、装いも一新され多くの拝観客のお参りがあった。また禅を中心とした茶、花、香の伝統



撮影：鈴木心

的文化の研修道場の建築もすすめられており多方面から完成が待ち望まれている。

○智蔵院津送

五月二十二日、二教区智蔵院住職故井上道友師の津送、新忌斎が厳修された。師は地域布教のかたわら本山内の承天閣美術館に職員・囑託として二十年勤務され、また京都仏教会の依頼を受け京都市斎場で参勤僧として勤められた。当日は管長を導師に、江上宗務総長はじめ一山、二教区、京都仏教会、他有縁の檀信徒が多数参列し、宗務総長より誄が奉読され、師の冥福を祈った。尚今後当分は智蔵院を同教区の桂徳院住職小出量堂師が兼務することとなった。

津送、新忌斎の香語は左の如し。

智蔵院道友和尚津送

栄辱昇沈一場夢 栄辱昇沈、一場の夢
覚来萬事鉄牛機 覚め来れば、萬事鉄牛の機
春風吹送還郷曲 春風吹送す、還郷の曲
満地無聲落花霏 満地無聲、落花霏と
別々

者全員が喜び、改めて岩澤画伯の冥福を祈った。

○鹿苑寺客殿障壁画落慶法要

五月二十七日、鹿苑寺(山木康稔執事長)で日本画家故岩澤重夫画伯による客殿障壁画の落慶法要が管長導師のもと厳修され、韜光室老大師、江上宗務総長はじめ各教区宗会議員、一山、縁故寺院、在家など多数が出頭した。

(関連写真巻頭カラー、関連記事10頁)

○相国会本部役員会

五月二十八日午後一時より本山会議室において、平成二十二年度相国会本部役員会が開催された。二教区理事の波多野外茂治氏を議長に選出して審議に入り、平成二十一年度事業・決算報告、二十二年度予算案、事業計画案がそれぞれ承認可決された。

当日の出席者は左記の通り。

第一教区 片岡 匡三 山木 康稔
第二教区 波多野 外茂治 牛江 宗道
第三教区 大塚 月潭

烈焰亘天留不得 烈焰天に亘って、留め得ず
當空宝月鎮長円 空に當る宝月、鎮長に円とこなえなり

喝

新忌斎香語

出格風標了了知 出格の風標、了了として知る
桜花落尽草長時 桜花落ち尽し、草長じる時
愚人不識無為境 愚人識らず、無為の境
宝泉山頭月滿堦 宝泉山頭、月堦ちに満つ
右 頼底九拜
定中昭鑑

○日田辯財天春季大祭

五月二十四日、大分県日田市にある西之山辯財天堂で春季大祭並びにお火焚祭が厳修され、管長を導師に、山木鹿苑寺執事長、矢野教学部員、山木財務部員、和田鹿苑寺執事が出頭して大般若が転読された。当日は雨天にもかかわらず多くの参拝者があった。また前回まで来賓として出席され、先ごろ急逝された当地出身の日本画家故岩澤重夫画伯が取り組んでいた鹿苑寺客殿障壁画が、無事に完成されているとの報告が管長よりあり、地元の参拝

第四教区 平田 一郎 五十嵐 祖伝
第五教区 錦織 貞久 藤岡 牧雄
第六教区 松本 憲融 他、内局

○二十二年度春期拝観報告

六月四日、春期拝観が終了した。今期も法堂、方丈、宣明(浴室)を公開し、一四、九九七名の参拝があった。秋期拝観は九月十五日(水)～十二月八日(水)の予定であるが、方丈屋根葺き替え工事着工につき、方丈の拝観は数年間は停止となり、代わりに開山堂の拝観を行うこととなった。

○観音懺法会

本山恒例の観音懺法会が六月十七日午前七時半より方丈において厳修され、早朝にもかかわらず多くの参拝客があった。

◆役配

導師 大光明和尚 太鼓 林光和尚
香華 哲永東堂 大鉢 正道座元
自帰 玉龍大和尚 中鉢 賢明座元

打磬 弘祐塔主 小鉢 宗秀座元
維那 豊光和尚

○臨黄総会

六月十八日、妙心寺本山で臨黄総会が開催され
江上宗務総長、坂根庶務部長、佐分教学部長が出
席した。

○東京維摩会

年内の開催日は左記の如くである。

管長坐禅会

八月休会 九月十二日(日) 十月九日(土)
十一月十三日(土) 十二月十一日(土)
※前号で案内しました九月四日は十二日に変更
になりました。

時間・午前十時半より正午頃迄

内容・「無門関」提唱、坐禅、茶礼

威儀・坐禅の組みやすいゆったりした服装が好ましい。

老師坐禅会

八月七日(土) 九月四日(土)

教区だより

第二教区

○教区総会

定期教区総会が、四月二十四日(土)午後三時
半より、料亭「畑かく」において、二教区十三カ寺
中十カ寺の出席を得て開催された。賦課金等を
徴収した後総会に入り、四月八日に遷化された智
藏院住職故井上道友和尚の津送が五月二十二日
に執り行われることを伝えた。また、十月二十五
日から二十七日まで九州で行われる本山、寺庭婦
人研修会への参加を呼びかけた。

会議のあと、懇親会に移り、日の暮れるまで歓
談の花を咲かせて解散した。

○智藏院津送式

智藏院住職故井上道友和尚の津送式が五月二
十二日(土)午前十時より、智藏院本堂において、
管長猥下導師の下、山内寺院、教区寺院に多数出
席いただき、また檀信徒の参列する中、荘厳に執

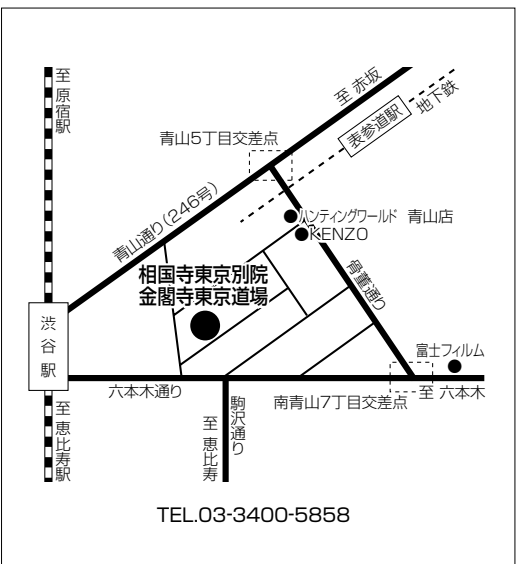
十月十六日(土) 十一月二十日(土)
十二月十八日(土)

※前号で案内しました九月十八日は四日に変更
になりました。

時間・午後一時より三時半迄

内容・「臨濟録」提唱、坐禅、参禅

威儀・袴を貸与するも、足りない可能性があります
ので、ゆったりとした服装でお願い致します。



り行われた。

なお、密葬の儀は、四月十日(土)午後より、豊
光寺和尚導師のもと、法類桂徳院和尚、大光明寺
和尚および慈雲院和尚に随喜いただき、親族のみ
でしめやかに執り行われた。

第三教区

○瑞林寺夢窓國師每歳忌

三月二十八日、瑞林寺(三重県津市片田井戸町
長谷寺高山宗親住職兼務)では、大本山から江上
泰山宗務総長、矢野謙堂教学・庶務部員を拜請し、
開山每歳忌を厳修した。

当日は「夢窓國師生誕地石碑」前に井戸町民こ
ぞって参列し盛大に法要が厳修された。

平成二十一年

十二月十四日 宗務支所（於・おおい町ホテル
うみんぴあ）

定期巡教、県情報公開課提出
書類、支所規則作成について
協議後、懇親会。

十二月十七日 第四教区前支所長 円福寺閑
栖田中耕宗和尚遷化

十二月二十一日 円福寺閑栖田中耕宗和尚密葬
（於・円福寺）

法類筆頭の長福寺和尚導師
のもと密葬式が厳修されま
した。

十二月二十五日 円福寺閑栖田中耕宗和尚津送・
新忌斎（於・円福寺）

耕宗師が小僧時代を過ごし
た高成寺（福井県小浜市・南
禅寺派）の小牧浩哉和尚を乗
炬導師に、当教区より龍虎寺
和尚を奠茶導師に、向陽寺和



「夢窓國師生誕地石碑」前にて

平成二十二年

一月十五日 寺庭婦人会 新年例会（於・海
岸寺）

新年度行事を協議。

一月二十三日 円福寺晋山式（於・円福寺）

閑栖和尚の津送からほぼ一
ヶ月後の平成二十二年一月
二十三日、新命田中太真和尚
の晋山式が執り行われまし
た。

本派より管長猥下、宗務総長、
また、新命和尚の修行当時の
道場師家である龍門寺（姫路
市・妙心寺派）の河野太通老
師の臨席のもと、およそ六十
名の尊宿の祝福を受け、円福
寺第八世の法燈を継承する
こととなりました。

二月六日

若狭相国会 役員会

平成二十一年

定期巡教、県情報公開課提出
書類、支所規則作成について
協議後、懇親会。

十二月十七日 第四教区前支所長 円福寺閑
栖田中耕宗和尚遷化

十二月二十一日 円福寺閑栖田中耕宗和尚密葬
（於・円福寺）

法類筆頭の長福寺和尚導師
のもと密葬式が厳修されま
した。

十二月二十五日 円福寺閑栖田中耕宗和尚津送・
新忌斎（於・円福寺）

耕宗師が小僧時代を過ごし
た高成寺（福井県小浜市・南
禅寺派）の小牧浩哉和尚を乗
炬導師に、当教区より龍虎寺
和尚を奠茶導師に、向陽寺和

二月八日 宗務支所 支所会（於・善應寺）
定期巡教経費案及び少年研
修会、若狭相国会総会日程等
について協議。

二月二十二日 宗務支所 支所会（於・善應寺）

三月一日 宗務支所 支所会（於・善應寺）

宗務支所規約案の作成作業。
宗務支所規約案について協議
後、支所規約を承認。

四月一日 若狭相国会 少年研修会（於・
本山相国寺、鹿苑寺）

児童四十六名、住職七名、相
国会役員五名、計五十八名参
加。

本山にて研修、齋座を頂き、
鹿苑（金閣）寺に参拝後、嵐
山「時雨殿」にて研修。

四月二日 寺庭婦人会 研修旅行（京都方
面にて）

四月二十七日 宗務支所 支所会（於・善應寺）

<p>大本山相国寺御用達 御法衣・仏具 (株)後藤利法衣店</p> <p>〒604-8273 京都市中京区西洞院通三条上ル 電話 (075) 221-4587 FAX (075) 223-0094 フリーダイヤル (0120) 014587</p>	<p>臨済宗御法衣調達 大本山相国寺御用達 湯浅法衣店</p> <p>〒606-0905 京都市左京区松ヶ崎杉ヶ海道町5-24 電話 (075) 705-2772 FAX (075) 705-2773</p>
<p>大本山相国寺御用達 庭園 設計・施工 樋口造園(株)</p> <p>〒602-8341 京・上京区七本松通中立売下ル 電話 (075) 462-1385 FAX (075) 464-6120</p>	<p>大本山相国寺御用達 精進料理 矢尾 治</p> <p>〒600-8486 京都市下京区高辻堀川町358 電話 (075) 841-2144 FAX (075) 841-2110 http://kyoto-shoujinryouri-yaoji.homepage.jp</p>
<p>總本山御用達 藤安田念珠店</p> <p>本店・〒604-8072 京都市中京区寺町六角角 電話 (075) 221-3735 (代表) 東京・札幌・福岡 各営業所</p>	<p>文化財堂宇修復保存 大本山相国寺御用達 社寺建築 設計・施工 数寄屋建築 澤甚株式会社 澤野工務店</p> <p>本社 〒605-0069 京都市東山区東大路通知恩院前上ル2筋目東入 TEL (075) 561-5394 (代) FAX (075) 533-3775 山科事務所・工房 〒607-8126 京都市山科区大塚元屋敷町62 TEL (075) 541-1257 (F)</p>
<p>貴重な御法衣の御用は 大本山相国寺御用達 後藤新助法衣仏具店</p> <p>〒616-8041 京都市右京区花園寺ノ前町30番地 電話(代表) (075) 462-3915番 ファクシミリ (075) 462-3616番 URL http://www.rinzai.jp E-mail: rinzai@rmail.plala.or.jp</p>	<p>大本山相国寺御用達 社寺建築 (株)北村誠工務店</p> <p>〒603-8225 京都市北区紫野南船岡東町45 電話京都 (075) 441-0563 FAX京都 (075) 441-0571</p>



● 編集後記 ●

2010年「円明」夏号をお届けいたします。第三次江上内局最後の半年となりました。計画いたしました事業の完成に向けてがんばって参りたいと思います。秋からはいよいよ方丈の修理工事が始まります。皆様にはご迷惑をおかけするかと思いますが、どうぞご協力いただきますようお願いいたします。

向陽寺住職鈴木元拙師の仏跡の旅はタクラマカン砂漠をはじめ、タジキスタン、ウズベキスタンなどの大乘仏教の跡をたどる旅ですが、今回はパキスタン仏跡紀行となっています。いずれも今まであまり光の当てられなかった、大乘仏教の伝播の跡をたどる貴重な体験記ですが、政情不安定な地域の旅は誰でも実行できるものではないと思います。師の熱心な探求心と健脚ぶりに頭が下がります。今度はどこを探検されるのでしょうか楽しみます。

(佐分 記)

平成22年8月1日

発行所/大本山相国寺・相国会本部

〒602-0898 京都市上京区今出川通烏丸東入相国寺門前町701 TEL 075-231-0301 FAX 075-212-3591
URL <http://www.shokoku-ji.or.jp> E-mail kyogaku@shokoku-ji.or.jp (教学部)

なが——い、おつきあい。



貯める、運用する、借り入れる、積み立てる、備える、管理する…
京都銀行は、人生のさまざまなシーンで皆様を応援します。お気軽にご相談ください。

飾らない銀行

 **京都銀行**
<http://www.kyotobank.co.jp/>



社寺庭園・町屋庭園・露地庭
作庭 管理

 **長岡造園**

〒616-8305 京都市右京区嵯峨広沢御所ノ内町13-3
電話 (075) 872-0005 FAX (075) 872-0004

印刷を極め、印刷を超える——

生産力と機動力、開発力と発想力をもって
「新しい社会に貢献する企業」を目指します。



情報セキュリティマネジメントシステム ISO27001:2005
日本水なし印刷協会 認可工場 (環境保全対策)

 **ヨシダ印刷株式会社 京滋営業所**

〒604-8277 京都市中京区西洞院通り御池下ル三坊西洞院町572-4 NOA高松殿ビル6階 TEL.075-252-5421
【本社】金沢 【支店・営業所・工場】東京・金沢・大阪・富山・福井・京都・静岡 URL <http://www.yoshida-p.jp/>



子どもが産まれたし
そろそろマイホームを
買いたいなあ。

私たちが夫婦と子どもたちの
将来のために、
上手にお金を貯めたり
増やしたりしたいなあ。

私たちの財産を
円滑に次の世代へ
バトンタッチしたいなあ。

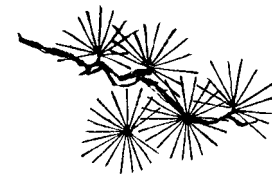
私たち三菱UFJ信託銀行は、
あなたの資産の
「頼れる相談相手」です。

 **三菱UFJ信託銀行 京都支店**

〒600-8006 TEL.075-211-7161
京都市下京区四条通高倉東入立売中之町85番

届出第6号 (社)不動産協会会員 (社)不動産流通経営協会会員 (社)首都圏不動産公正取引協議会加盟

www.shoyeido.co.jp



香



大本山相国寺御用達

香老舗 **松 崇 堂**

京都本社/京都市中京区烏丸通二条上ル東側 〒604-0857 TEL.075(212)5590
東京支店/東京都中央区日本橋人形町2-12-2 〒103-0013 TEL.03(3664)2307
札幌支店/札幌市中央区南8条西12丁目3-6 〒064-0808 TEL.011(561)2307

京都本店 産寧坂店・銀座店 人形町店 青山香房・札幌店



先人たちの賜物を伝えていく仕事。

デジタル再製画「伝匠美」www.dnp.co.jp/denshoubi/

DNP

大日本印刷株式会社 www.dnp.co.jp

御法衣・御袈裟・御水引・戸帳・打敷
華蔓・御晋山式用品一式・稚児装束

各大本山御用達

橘兵 草木兵助商店

〒604-0024 京都市中京区衣ノ棚通御池上ル西側
電話(075)221-0934番 振替京都01090-4-3476

抹茶

全国並びに関西茶品評会 第一位
自園茶農林水産大臣賞29回受賞

有馬頼底管長御好

御濃茶

まんねんのみどり
萬年の翠

御薄茶

じょうこう
常光



大本山相国寺御用達

宇治久小山園

〈宇治茶製造販売〉

本社 京都府宇治市小倉町寺内86

伊勢丹店 シェイアル京都伊勢丹B1

西河院店 中京区西河院通御池下ル

茶房「元庵」も取り扱います。

http://www.marukyu-koyamaen.co.jp

大本山相国寺御用達

京表具

絵画・墨跡・織物・修理・一般表具一式
宗紋襖紙・御殿引手 発売元

こう えつ あん
浩 悦 庵

古文化財保存修理研究所
矢口浩悦庵

本社・工房 〒602-8025 京都市上京区衣棚通り丸太町上る今葉屋町318
TEL(075)254-6021(代)・FAX(075)254-6022
東京営業所 〒203-0014 東京都東久留米市東本町9-9 TEL・FAX(0424)72-6239

http://www.koetsuan.com E-mail:office@koetsuan.com



前管長 止々庵老大師 十七回忌法要

Your Global Lifestyle Partner
 ~お客様の感動を創造します~

国内旅行

宇宙旅行



海外旅行

大会幹旋

JTB西日本団体旅行京都支店

〒604-8152 京都市中京区烏丸通錦小路上ル手洗水町 670 京都フクトクビル 5 階
 TEL:075(241)0139 FAX:075(255)6564
 (営業時間 9:30~17:30/土・日・祝日休業)



二条城のほとりに
 寛ぎがある

 **京都全日空ホテル**

〒604-0055 京都市中京区堀川通二条城前
 ご予約、お問い合わせは (075) 231-1155
<http://www.ana-hkyoto.com>



相国寺派 第六教区 沖繩
嶺南山 通天寺 落慶法要



僧堂拈華室老大師 三回忌法要
並びに止々庵老大師 十七回忌宿忌

柴田是真 作品

(承天閣展示作品より)

承天閣美術館事務局長 鈴木景雲

柴田是真の漆×絵 —江戸の粋・明治の技

承天閣美術館では平成二十二年四月三日から六月六日まで、「江戸の粋・明治の技—柴田是真の漆×絵」展が開催された。柴田是真(一八〇七—一八九一)は幕末から明治中期にかけて活動した漆芸・日本画家。和紙に色漆を用いて描く「漆絵」を考案し、

掛軸や画帖、屏風など多くの絵画作品を残した。また漆工芸においては、陶磁器や金工芸を模倣した「だまし漆器」なるものを考案し、多様な工芸品を世に出し世間を驚かせた。明治期には欧米や国内の博覧会に多くの作品を出品し、数々の賞を受けている。近代美術工芸の発展に大きく寄与し、明治二十二年に帝室技芸員に任命された。期間中には板橋区立美術館館長安村敏信氏・時雨亭文庫理事長冷泉為人氏の講演、また官休庵若宗匠・千宗屋氏と有馬管長との対談等様々なイベントが催され、二万三千人の拝観者数で賑った。

瀑布に鷹図

(ばくふにたかず)

布のように流れ落ちる滝の水面に写っている自分の顔を、親鷹がじっと見つめている。それを子鷹が不思議そうに眺めている。実際にはありえない。是真の超絶発想である。

(米国立ドソン・コレクション)



瀬戸の意茶入

(せとのいちゃいれ)

誰が見ても陶器。どう見ても瀬戸茶入。なんと竹に漆を塗って作ってある。土は一切使っていない。牙蓋(げぶた)から釉流れ、胴紐まで漆で再現。重量わずか42グラム。「茶会の道具拜見で、客がびくびく」を想像したのか。まさに超絶技巧。

(個人蔵)



滝桜小禽図

(ろうおうしょうきんず)

天地、風帯から一文字まで全て描かれたもので、描き表貝と呼ばれる。岩壁に、滝を描いた軸が掛かっているという構想。目の前に大きな岩と伸びた山桜の枝が迫り、そこを小禽が飛び。本紙の下に滝壺があるが如く、中から瀑布の水があふれ出している。実に豪快で、立体感あふれる作品である。

(特別出品「鹿苑寺蔵」)



とわ 永遠の安らぎ —石のカウンセラー—

株式会社 石 杖 都 みやこ

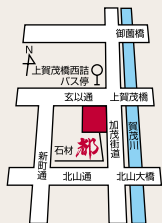


代表 坪田 忠男

年中無休 営業時間/AM8:30~PM6:00 (日曜日PM5:00まで)

本 社：〒603-8103 京都市北区小山北玄以町 24 番地 ヨクソ ヨイイン 電話(075)491-4114(代)
(上賀茂橋西詰バス停前)
工 場：京都市北区上賀茂神山 389 番 24 電話(075)702-2440
(洛北病院バス停前)
夜 間：京都市左京区岩倉南池田町 117 電話(075)702-8814

御一報次第、遠近を問わず参上いたします。



心のすがた

清寂養和 張愈

清寂和を養う

ひっそりと静かに其の中に、

和らかなる気を養う

撮影◎慈照院副住職 久山 哲永
(中国桂林 漓江)